

平成20年4月7日

北海道開発局 局長 鈴木栄一様

北海道自然保護協会	会長	佐藤謙
北海道自然保護連合	代表	寺島一男
富川北一丁目沙流川被害者の会		
十勝自然保護協会	会長	安藤御史
ザ・フォレスト・レジャーズ	代表	市川守弘
自然林再生ネットワーク	代表	前田菜穂子
ユウパリコザクラの会	代表	梅木久嗣
自然保護学習塾 石城塾	代表	石城謙吉

沙流川水系のダム問題に関する再質問状

昨平成19年12月19日に私たちが貴開発局に提出した公開質問状に対し、さる平成20年2月12日付けでいただきました回答につきまして、下記の項目について再質問いたします。必ずご回答下さい。

なお、私たちの沙流川のダム問題に関する活動は、全道にまたがる自然保護団体の連名で行っているものであり、沙流川のダム計画は室蘭開発建設部が独自に行っているものではなく、北海道開発局の重要な計画として進められているはずですが、回答のための作業をどこで行うかなどは問うところではありませんが、回答はあくまでも開発局長の責任において、開発局長名で出される事を強く要望します。

また、平成15年の台風10号の後、ニ風谷ダム管理事務所会議室にて行われた開発局と我々との話し合いを最後に、それまで5回行われた話し合いの継続を約束していながら、その後途絶えております。約束通りその再開についてもご回答を強く要望します。再質問によるご回答は文書はもとより、現場での実見により、わかりやすくご説明いただきたいと強く要望いたします。



1 二風谷ダムの現状に関して

質問 1

二風谷ダムには、平成 18 年 10 月の段階で、当初計画の堆砂容量 550 万立米の 2 倍を超える 1189 万立米の土砂が堆積している。ダムの堆砂容量は、稼動 100 年を目途とする堆砂総量として設定するものである。このことからすると、二風谷ダムの堆砂容量の設定はこのダムの現実の土砂堆積速度の二十分の一以下の見積もりだったことになり、ダムの設計が基本的に誤っていた事になる。開発局はこのことを認めるか、否か。

再質問

回答では 沙流川流域において近年豪雨が頻発しています——こうした豪雨によって中上流の山林において山地崩壊、土砂崩落の増加や、沢に堆積していた土砂の流下により沙流川流域における土砂生産が従来に比べて非常に大きく——これらにより二風谷ダムにおいては当初の計画で想定していた以上に流入土砂が増大し、結果的に貯水池内の土砂堆積が進行したものと考えております。

とあるが、二風谷ダムの膨大な土砂の堆積状況の計画に問題があったのではなく、気候に問題があったということか。

では、100 年確率の洪水への対策とは何なのか。

このダム稼動開始後の 10 年間に大きな雨台風があったことは事実である。しかし、台風のあるなしに関係なく、この 10 年における二風谷ダムの年間堆砂量は最低年（平成 14 年）でも 35 万立米であり、多い年では 200 万立米が 2 回、100 万立米台が 3 回を数えている。つまりこの 10 年間のうちの半数の年で 100 万立米以上の土砂堆積があったことになる。このダムの膨大な堆積土砂の発生は、天変地異的な異変によるものではなく、沙流川のもともとの特性によるものであることが明らかだ。それは流域の住民には古くから知られてきたことだった。沙流川はシ＝本当に シリ＝あたりに ム＝つまる カ＝させるというアイヌ語地名の通り、ダムには向かない川であることが幾度となく専門家から指摘されていることである

二風谷ダムの設計自体が誤っていたことが明らかになった以上、沙流川の治水計画全体を根本的に今こそ見直さなければ、手の施しようもない負荷を背負い、責任の負いようもない深刻な事態となることが予想される。勇気を持って見直すべきではないか。

質問 2 二風谷ダムの当初計画における堆砂容量の数値 550 万立米は、どのような調査、どのような計画によって得られたものか、算定の根拠をお聞かせ願いたい。

再質問

二風谷ダムの稼働後 10 年間の年間堆砂量の平均値は 118.9 万立米であり、これは 100 年間の堆砂容量を 550 万立米とした開発局の予測の実に 20 倍の堆積速度である。

質問 1 への回答の中で、**近傍の既存ダムの堆砂実績及び推定方式から、100 年分に当たる堆砂量を求め、堆積容量とした**とあるが、どこのダムのどのような堆積実績及び推定式から 100 年分の堆砂量を求めたのか。またこのような誤差はどのようにして出たのか。具体的な説明を求める。

科学的にも常識的にも、20 倍もの誤差を出す推定はもはや推定とは言い難い。開発局の言う推定値とは何か。このことについても、考えを聞きたい。

質問3 平成 19 年の計画変更によって、このダムは洪水期(7-9月)の間水位を0(標高40 m)に落とし、洪水発生時のみ満水にすることになった。この、洪水時の貯水後の放水は、どのようなゲート操作によって行うのか。

再質問

質問は**洪水の貯水後**の放水はどのようなゲート操作によって行うか、である。

回答は**洪水調節を行った後は洪水調節終了時のゲート開度のまま放流を続け—下流に支障を与えない程度の流量を限度として放流を行う**、と述べている。

しかし、我々の質問は平成 15 年の台風の時に下流に危険をもたらす流量の放水が行われて住民を危険に曝した事実があったことに基づいての質問である。どのゲートを、どの時点から、どのように開くのか。また、下流に支障を与えない程度の放流量とは何にもとづく、どのような数値なのか具体的に平取ダムの計画と平成 15 年の台風 10 号時のゲート操作を具体的に時系列で示していただきたい。我々の実見では、ゲートの故障や流木が詰まり操作不能の実態もあったことから、平取ダムではこのような現実に対してどう対応する計画なのか、このような場合の危機管理方法も具体的に台風 10 号の実態に基づき示していただきたい。

質問4 現在このダムに貯留している 1200 万立米の土砂は、上流から堤体近くにかけて砂礫、砂、粘土、ヘドロ等の順で分離しているはずである。それらはどのような形態で、また量的にはどのような配分で堆積しているか。

再質問

調査した方法、調査地点、を現場で直接ご説明いただきたい。またボーリング地点と深さ、ボーリング調査によって得られた沈殿物の種類とその垂直分布、およびその厚み、沈殿物中の有機物の種類を示していただきたい。グラフではあいまいなので数値での表を示していただきたい。

回答では**二風谷ダム貯水池内には有機物が多く嫌気化しているいわゆるヘドロと言われて**

いるものは確認されていない、としてその理由に COD、DO、硫化物等々の測定データを挙げている。

しかし、我々が二風谷ダム下流域の各所でたえず目にし、手にするあの粘性の強い、しかも上流部にはない泥状のものは何か。そしてあのどぶ臭い匂いは何か。

ヘドロに関する分析に用いたサンプルは湖底のどの部分から、どのようにして採取され、またサンプル数はいくつなのか。サンプリングに付いては現地で、実際に行ってみせていただきたい。

さらに、我々がいうヘドロとは一般市民が常識で言うヘドロで「流れの悪い水底などに溜まった柔らかい汚泥」(岩波 広辞苑)である。その汚泥が二風谷ダムから大量に流出し、それがダム下流域の河床の砂礫を覆い、産卵の妨げや卵の死滅を招き、河原の各所に堆積し、海に流入して、現にシシャモや他の海産物の漁獲に悪影響を与えていることを否定できない。あの汚泥をヘドロと言おうと SS と言おうと、下流の生態系に大きな負荷を与えるものをダムが排出していることが問題なのである。この現状と具体策を具体的に示していただきたい。

質問5 ダムは川を流れる土砂の量と質を(大小の粒径)を変えてしまうことが、全国の河川であきらかになっている。上流から二風谷ダムに流入する土砂の粒径構成とダムから流出する土砂の粒径の変化は現在どのようになっているか。具体的数値と調査方法を教えて欲しい。

質問6 現在、二風谷ダムに流入する土砂量とダムから排出される土砂量の比率はどのくらいか。この具体的数値と調査方法を教えてほしい。

再質問

我々が求めたこととは異なる回答になっています。

二風谷ダム及び貯砂ダムを界にして流速が変わることから、掃流力が変わり送流が運ぶ土砂の粒径や土砂の量に変化があると予測されますから、二風谷ダムを境にして、上流側から流れ込んだ土砂の各粒度毎の量及び、ダムから下流に流れ出した土砂の各粒径ごとの量について問うたものです。しかしながら、**流下中のものを正確に把握することは困難ですが、貯水池内に貯まった土砂を調査することによりどのような、物が流入したかを把握しています** とありますので、以下のことにご回答下さい。

1. 二風谷ダム上流にある貯砂ダムの流れ込み付近において、沈殿した土砂のボーリング調査データ及び堆砂した土砂の底部までの粒度分布と量。
2. 二風谷ダムのオリフィスゲート及び、クレストゲート付近のボーリング調査データ及び堆砂した土砂の底部までの粒度分布と量
3. 二風谷ダムに流れ込んだ土砂100のものが時差もなく、二風谷ダムから下流に100流れるのかどうか。もしも土砂の量、粒径に違いが生じた場合その影響

について

4. 流下する水が含む砂利の量が少ないと、“お腹が空いた状態”になり、河床や川岸の砂利をどんどんむさぼり食い、その結果、河床低下を招くことは砂防学の指摘するところですが、二風谷ダムを界にして下流側に流れ出す水が含む砂利の量が少ない場合、下流側の砂利が吸い出され、その結果河床低下、河岸崩壊が誘引されているのではないのでしょうか。詳しくご説明下さい。

質問7 二風谷ダムの稼働開始後ダム下流の水質が汚濁し、特に平成 15 年の台風時には堤体下部のゲートが開放されることによってダム内に発生・滞留していた膨大なヘドロが海に流されたことについてどのように認識しているか。

再質問

平成 15 年台風 10 号による洪水後、二風谷ダムから下流いったいではシルト状の大量の微細砂（ネトネトした泥）の堆積が大量に見られましたし、その一部は開いていた樋門から逆流して住宅に入り込み、住居や家具を悪臭を放つ泥まみれにしています。沿岸ではシルト状の微細砂が漁具を埋めていました。そこで以下の質問にお答え下さい。

1. 洪水後のダム下流における堆砂はシルト状の微細砂が多量に見られたにもかかわらず粒径の大きな粗い砂礫が見られなかったのはどのような理由かお答えいただきたい。
2. 富川地区の樋門から逆流した沙流川の泥水が住宅に入り込み、住居や家具を泥まみれにし、悪臭を放ちましたが、この泥が放つ悪臭はどのようなものなのか、なぜ悪臭を放ったのかその理由についてご説明いただきたい。
3. 沿岸の漁具を埋めたのはどのような泥土でなぜそのような泥土であったのか説明いただきたい。
4. 全国一級水系水質ランキングが 3 年連続 1 位との事ですが、採水地点と採水方法、採水年月日を示していただきたい。二風谷ダムの運用後も水質は良好というのなら、ダム下流で採取した水についての検査結果を示していただきたい。
5. 河川に生息する水生昆虫は水質を知る手がかりとしての指標生物となるものです。沙流川に生息する水生昆虫について、調査地点と調査日および水生昆虫の種類と量について示していただきたい。
6. 沙流川にはウグイ、マルタ、エゾウグイが生息していると思われていますが、これらが生息していた場所及び産卵している場所を示していただきたい。

II 平取ダム of 建設計画に関して

質問1 平成19年の計画変更によって、堆砂容量が1190万立米から130万立米へと一気に九分の一に減らされたが、これは排砂ゲートを設置することにしたためと考えられる。しかし、黒部川の出し平ダムや宇奈月ダムからの排砂ゲートによる土砂の放流が、同時にダム内に貯留された多量のヘドロを放出して富山湾の漁業に大きな災害をもたらしていることについて、どのような認識をしているか。

再質問

1. 回答では**出平ダム、宇奈月ダムでは現在では——環境省の結果から特に問題となるようなものは見られていないとされています**となっているが、では、住民運動が今も続けられているのは何故か。それは現在もときおり（年1回程度）行われるゲートの開閉により、貯水池内に発生したヘドロが土砂とともに排出されるからではないのか。お答えいただきたい。

2. **環境調査の結果特に問題となるようなものは見られない**とありますが、環境調査の対象とした調査項目、および特に問題となるようなものは見られないとした、事象は何なのか、また、その根拠を示していただきたい。

3. 上流から平取ダムに流れ込んできた土砂（粒径と量）を100とすれば、平取ダムから下流に時差もなく100流れ出すのか説明いただきたい。

4. 3の質問通りでなければどのような影響が現れるのか説明いただきたい。

5. ダムに流れ込んだ土砂の粒度分布はどのようになると分析しているのか水平垂直分布状況を詳しく説明いただきたい。

6. 放流口には流木等が塞がる可能性がないか、二風谷ダムのように塞がった場合洪水中の平取ダムの操作方法を教えていただきたい。

7. 秋口には大量の落葉が流下し、平取ダムに集積するとおもわれますがその、予測について詳しく教えていただきたい。また、洪水時には落葉がダム貯水池内で土砂に埋まるわけですが、その期間、場所、及び排出される割合の予測を教えていただきたい。

質問2 平取ダムは総貯水量が4580万立米と二風谷ダムより大きい反面、灌水面積は二風谷ダムの4.3平方キロに比べて3.1平方キロと小さく、常時満水位の水深が22mを越える、二風谷ダムより4倍以上深いダムである。このダムが作られる額平川は流木が多いことで知られている。このようなダムは、湖底に堆積する大量の有機物が無気的環境下で分解することによるダム特有のヘドロがもっとも大量に生成されるダムと見てよい。このダムの融雪時のゲート開放によって、堤体の底部から大量のヘドロが放出され、それが河口に達して富川一帯の海域の漁業に富山湾同様の多大な被害をもたらすことが予想されるが、このことについて、どう考えるか。

再質問

1. **貯水池に流入する流木については、一般的には洪水時に多く流入するため、網場を設定して、取水後速やかに流木を回収することを考えています**とありますが平成15年の台風10号では、網場やロープが切れて多くの流木が流下し、オリフィスゲートにささりこんだり詰まったりした。流木の多いことで知られる額平川に計画されている平取ダムの堤体低部に設けられている、開口面積の小さい、しかもたった一つの排砂ゲートが、あのような際に閉塞する危険があることに全く答えられていない。流木の影響は洪水時に現れるのであるから、ニ風谷ダムのように網場で流木を止められなかった場合の操作、とその影響について詳しく説明いただきたい。
2. 平取ダムにおいて**自然状態でも増水し土砂移動が盛んになる雪解け時期に、毎年およそ1ヶ月の間ダムに水をためることなく水や土砂もそのまま流す運用をすること**とありますが、この時期はサケやサクラマス、シシャモなどは卵あるいは幼稚魚の状態にあります。水生昆虫のユスリカ、カゲロウ、トビケラなどは羽化期になっています。したがって、この放流がサケやサクラマス、シシャモ等魚類・水生昆虫等へ与える影響二つについてお答えいただきたい。
3. 平取ダムの放流時期に流れる土砂の量・粒径は、平取ダムがなかった場合に比べてどのような違いがあるかお答えいただきたい。
4. 平取ダムでは**水質の悪化しやすい夏季には常時満水位より約15センチ低い制限水位で運用する**というが、その水深は19mである。水深が1~2m程度の道内各地の小規模な砂防ダムでもヘドロは発生しており、これでヘドロの発生が防げる事はないと常識的に考えるが、詳しくご説明いただきたい。
5. **夏季は2日に1回程度貯水池の水を入れ替える**というがそれは流入量と貯水量を単純計算しただけのことではないのか。ダム湖にかぎらず、流水の中に止水域を作った場合は必ず滞流域、いわゆる死に水の部分が出来るのは常識である。このことについて説明いただきたい。
6. 10月から翌春の融雪期までの半年間の水深は約34mである。ヘドロは低温では発生しない根拠があるのか、あるならそれを示していただきたい。また、夏季の3ヶ月間は浅くして運用するからヘドロは発生しないという理由づけは、このことから成り立たない。このことにもお答えいただきたい。

平取ダムの貯水池内に有機物が沈殿堆積する場所が出現するかどうか詳しく教えていただきたい。

質問3 平取ダム予定地の右岸は二セウ層頁岩からなる急斜面である。平成15年の台風10号の際に崩壊密度が極めて高かったのは、まさにこの二セウ頁岩の急斜面だった。現に、予定地の右岸には新旧無数の崩落跡が認められる。したがってダムが作られた場合にはダム湖斜面の崩落による大量の土砂の崩落が繰り替えし起こると予想される。このことから見ても、予定

地はダム建設不敵地と考えるが、見解をお聞きしたい。

再質問

質問をしたニセウ頁岩はダムサイト右岸の地域にあるとの記録がないことを確認したが、砂岩、玄武岩、頁岩のどれであれ、現にニセウ層が大きな変形を受けた、亀裂の多い、崩落しやすい地層であることには変わりなく、現地の状況が示している。回答では**基岩部を含む崩壊は生じていない、またダムサイト及びその周辺では――ダム建設に必要な強度を確認している。**としている。しかし、我々が質問したのはダム建設がうまくいくかどうかではない。ここにダムを作った場合に、右岸斜面の地層部に今も見られる崩落現象が灌水による間隙水の増大と毎年のゲート洪水吐の開放が崩壊を誘引するような問題を引き起こすのではないかという心配である。これに対して、**事前に地すべりの可能性に関する調査検討を行い必要に応じて対策を実施する、試験灌水の際にも貯水池周辺の安全性の確認を行う**としか答えていない。こうした非常に重要な調査検討や安全性の確認は着工の前に充分に行うべきであり、その結果を待って初めてダム建設の適否を判断しうるはずではないか。

このような調査検討を流域委員会で討議されたのかどうか、又その調査検討結果を示していただきたい。

現状からみて、平取ダム建設予定地では不可避と考えられる地すべり対策について、これまでにどのような調査検討、安全性の確認を行ってきたか、改めて質問する。

質問4 平取ダムが計画している融雪期の放水は、常時満水の標高167.4mから最低水位の標高145.0mまで、水位を22m以上急激に下げる事になる。このような場合には満水時の水圧で土中間隙水が増大することによって軟弱化した斜面に、崩壊がより起こりやすくなることが知られている。上記3で指摘したように、もともと崩落がおきやすい予定地の斜面が、この排砂ゲートの開放によって更に激しい崩落を引き起こす可能性が極めて高いと考えられる。**これについてどう思うか。**

再質問

回答では**事前に調査検討を行い必要に応じて対策を実施する**となっているが、その事前調査検討と対策を具体的に示していただきたい。

また、融雪期におけるダムの運用は、常時満水位から徐々に水位を下げて、ダム下部に設ける放流設備を開放するから、ダムの運用に支障を及ぼすような崩落を引き起こすことはないとしている。しかし、もともと脆弱な地層と崩れやすい地形をもつ、この地域で土地間隙水の増大により弱体化した斜面の崩落を防ぐのは容易なことではない。徐々に水位を下げるというが、毎年融雪期の短期間に繰り返される放流設備の開閉はダム湖周辺の斜面にとっては急激な水位変動以外のなにものにもなりえないはずである。崩落をひきお

こすことはないという根拠を具体的に示していただきたい。

質問5 額平川のダム建設予定地の上流右岸斜面に分布する白亜系中部蝦夷層群の泥岩は地すべりを起こしやすい性質を持つことで知られ、平成15年の台風10号による洪水時にも日高地方でも最大規模の斜面崩落を引き起こした。この流域特有のこのような現象に、黒部川と同じ方式の排砂ゲートでは対応できないはずだとの見方が専門家の間に多い。平取ダムで予想される膨大な土砂と流木の流入に対する新機軸があるのか否か。

再質問

回答は排砂ゲートの説明と、貯水期間の流木の扱っただけに終わっているが、我々の質問は、洪水時における額平川特有の膨大な土砂と流木の流出に対して、排砂ゲート方式のダムが果たして対応できるか否かである。平成15年規模の洪水に対して排砂ゲートや洪水吐きの閉塞などを防ぐためには、これまでのダムにはない新しい対策が不可欠と考えられる。そのためにどのような対策が用意されているのか、改めて聞きたい。

質問6 平取ダムでは排砂ゲートによって毎年排砂をおこなうことにより、堆砂量を130万立米と極端に少なく見積もっているが、ダム湖の上流側に堆積する土砂までがゲート開放によってすべて放出されるとはとうてい思えない。このダムに年間流入する土砂の量、質(粒径)、と流出する土砂の量、質はどのように予測されているか。具体的数値を知りたい。

再質問

計算によるダムの年間流入・流出量はどのような根拠で計算されたのか、わかりやすく説明いただきたい。

また、年変動を無視した平均計算値となっていますが、洪水時にはこの値よりも大きく変動すると思われます。上流と下流の土砂の量、粒径の差について予測見解を示していただきたい。

質問7 ダムを建設した場合に下流側で河床低下の起こる可能性について、どのように考えているか。また、河床低下が発生した場合にはどのような影響が現れると予測しているか。

再質問

回答では近年は二風谷ダムの建設前後の期間を含めて(河床)は比較的安定していますとなっていますが、

1. 二風谷ダムから下流で行っているという河床低下の測定は、具体的にどのようにされ、どのような科学的裏付けに基づいた方法か。
2. 二風谷ダム下流の河床の測定ポイントにおいて河床材の起源(どこで発生して

流れてきたか)の調査はおこなったのか。また川幅は測定しているか。

3. ニ風谷ダム下流の河床材の移動状況について調査したか。
4. ニ風谷ダム下流の各所で川岸の崩壊が見られるが、こうした崩壊の原因と崩落土砂の量と何処に流下したかを追跡調査しているか。
5. ニ風谷ダム建設後、ダム下流で河岸が崩れたところはどこか。毎年ごとに具体的に示していただきたい。また、護岸工事、補修工事が行われているが、その場所も年度ごとに具体的に示していただきたい。
6. ニ風谷ダム、下流の富川地区の国道橋の橋脚が深く掘り下がり、土砂を補って対策していると聞くが、いつどうしてこのようなことになったのか、このようなことが過去にもあったのか、示していただきたい。

質問8 去る平成19年11月18日の我々一同の現地視察の際に、その日のものと推定される鮮明な、前掌幅17センチ(推定体重350キロ前後)のヒグマの足跡と2、3日前と推定される親子(今年の子)の足跡がダム建設予定地の河原で観察された。

ここは何時訪れても足跡が見られ、地元ではクマの通り道として良く知れていて、極めて重要なヒグマの生息地であることは間違いない。そこにダム建設という大きな攪乱を加えることに伴う人身、ヒグマの安全対策はどのように考えているか。

再質問

ではヒグマの調査は何処で、どのアセス会社で、どのような調査を行い、その結果はどのようなものか具体的にお示しいただきたい。

専門家とも相談し必要に応じて対策を検討したいとしているが、この地域の自然がアイヌ民族にとっての重要性を考えれば、ヒグマの安全対策は事故防止からも、また広域に移動するヒグマへの攪乱の危険性から地元住民にとっても、また工事従事者への安全対策二つについても、人命にかかわる問題であるから着工前に十分に立てられているべきである。相談する専門家とは誰で、どのような安全策が現在考えられているのか具体的に示していただきたい。

質問9 ヒグマを頂点とする豊かな生態系がある平取ダム建設予定地は、まさにイオルそのものである。そのイオルを破壊するダム建設とイオル再生事業をしている国土交通省の自己矛盾をどう考えるか。平取ダム建設よりイオルを保全再生すべきではないか。

再質問

地域の伝統的文化であるアイヌ文化の保全については、ウタリ協会平取支部をはじめとする関係者の方々と充分ご相談しながら進めて参りたいとされていますが関係者とどのように相談しながら進めていくのか具体的に教えていただきたい。地域の意向は今後どのような

方法で集約されていくのか。

平取ダム地域文化対策検討会の今後のスケジュールを教えてください。
なお上記委員会の委員長が理事長を務める「グランドワーク」に、対策案の起草を発注していると聞くが、問題ではないかお答えいただきたい。

Ⅲ追加質問に関して

再質問

平成15年の台風の際に二風谷ダムで停電が起こり危機管理上の大きな不安を残したことについて質問したが、これに対する回答は 停電があり短時間に断続的に繰り返されたため、ダムの自家発電装置の自動切換えが追従しきれず、一時的にダム遠隔操作が停止し—と認めている。それにも係わらず二風谷ダム操作を的確に行ったことに対し表彰を受けました。との答えは成り立つのか。当日現場をつぶさに見ていたもの一同としては疑問である。

当夜、水門管理担当者に水門は開けたままでよいから逃げるようにとの指示が出されたのもダム操作に大きな問題と不安があったからではないか。このことを具体的にご説明いただきたい。

Ⅳ再追加質問

1. 昨年末に富川地区では伏流水の低下で水道水が不足し、節水制限が出たと聞くが、この伏流水の水位の低下がどのような原因で発生したのか、説明いただきたい。
2. 沙流川流域の地下水の調査を行っていると思われるので、地下水の水位の変動がおきているかも含めて、調査データを示していただきたい。
3. 河床低下が地下水位を低下させることはないか、根拠を示して説明いただきたい。
4. 二風谷ダム下流で計画されている河道掘削は地下水位に影響を与えることがないか、根拠を示して、説明いただきたい。
5. 平取ダム建設後に下流域で河床低下が発生するか、しないか根拠を示して説明いただきたい。
6. 平取ダム予定地のチノミシリに穴を開けるボーリング調査を実施したのはいつか、お答えいただきたい。

7. 平取ダム予定地のボーリング調査をした場所がチノミシリであることを知ったのはいつかお答えいただきたい。

8. 平取ダム予定地のボーリング調査の前にアイヌ文化の調査を行ったかどうか、行っていなかったとすれば、なぜ調査を行わなかったのか、お答えいただきたい。

連絡先・事務局 二井田高敏

〒050-0085 室蘭市輪西町2-7-9

電話 0143-44-4823